

(研究ノート)

堀内文一の神学

——その評価と今日の影響——

松浦 剛

序

わが国において、「日本キリスト教史」の著作が、何冊か発行されてきた。その中で、いわゆる福音派諸教会にかかわる歴史記述が欠落する傾向にあった。ところが、一九九〇年代になって、^①福音派諸教会の業績が、正当に評価されて書かれるようになった。一九二二〜一九二六年の、大正時代と呼ばれる時期に、福音派諸教会がめざましい宣教の足跡を残したことが紹介されるようになる。

本研究ノートで取り上げる堀内文一（二八七五〜一九四〇）は、一九二二〜一九二六年の福音派活躍の支え手の一

人である。今日まで真正面から堀内文一に光を当てることがなかったので、生涯の概略と業績の一端を紹介したい。また堀内文一と同じ時代に生き、奉仕した山室軍平（一八七二～一九四〇）が、ともにメソジスト信仰を貫きながらも、おかれた奉仕の場や所属組織によって、奉仕の内容に相当の隔たりがあることも記したい。

堀内文一の生涯

一、生い立ちと少年・青年時代

堀内文一は、藩士堀内恒平の次男として、一八七五年八月一日、大和郡山において誕生した。父親恒平は、文一の幼いときに死亡した。そのため、文一は母親と長男堀内岳太郎の手で、養育されていた。

その当時、教育というと尋常小学校や高等小学校卒、というのが一般的であった。文一は藩士の子ということ、向学心に燃えていたことなどから、郡山中学へ進学した。文一は中学生となり、読書に励み、一般教養を身に付けることを怠らなかった。一年もしないうちに、文一は中学生の間で重んじられる存在となる。不幸なことに、文一の在学中に郡山中学に問題が生じ、鋭氣が内に満ち、正義感を貫き、学生ストライキの指導者の一人となる。¹⁾ 中学校内のいざこざに心傷つき、四年生で中途退学した。

文一は、郡山を去り大阪伝法（現・大阪市此花区伝法）へ移る。そこには、二十五才の兄岳太郎が結婚して居住していた。兄は毛糸紡績会社の技師であった。文一は兄の会社に短期採用された。兄岳太郎は、大阪伝法聖公会講義所に通っていた。²⁾ 弟文一をそこへ連れていき、竹田俊造（一八七三～一九五〇）にひき会わせる。竹田は、一八九

三年に同志社普通学校文学部に入學した学生であった。日曜日ごとに、京都から大阪に通い、聖公会講義所における奉仕を担当していた。文一は竹田を通して、キリスト教信仰の手ほどきを受けた。約一年間にわたる求道生活を送る。

一八九五年、文一も同志社普通学校文学部に入學した。ほんのわずかの期間ではあったが、山室軍平と机を並べて学生生活をする。新神学の流行で、山室は同志社六年の学びにピリオドを打つ。³⁾

堀内文一が同志社に入ったとき、創立者新島襄（一八四三～一八九〇）は、召天して五年が経過していた。⁴⁾ 同志社においてキリスト教一般教養を身に付けることはできた。が、自分自身の信仰を力強く養い、大きく飛躍していく迫力ある歩みはできなかった。そのため、同志社における学びは一年間で、打ち切ってしまう。兄岳太郎が京都糸絹紡績で働いていたので、文一もそこに短期入職し、生活費を稼ぐ。

二、キリスト教受容と献身修養

キリスト教主義学校同志社にきたものの、肝心のキリスト教信仰がはつきりしなかった。ところが、信仰への開眼のきっかけを作ることがあった。一八九六年に、B・F・バックストン（二九六〇～一九四六）が、⁵⁾ 同志社で講演し、その人格、品性、信仰に触れた。バックストンは、一八九〇年にイギリスから来て、山陰松江で六年間にわたる働きを展開していた。堀内の先輩竹田は、バックストンの感化を受け、すぐに松江に移る。堀内も一年後の一八九七年五月に松江に行く。

堀内は、キリスト教信仰を明確に受容することができた。イエス・キリストからの召命の声を聞き、献身者としての道を進む導きを得ることができた。単に、竹田俊造やバックストンを慕って松江に行ったのではなかった。雲の柱、火の柱が動くのを実感したからである。堀内は、一九〇五年まで、丸八年間山陰松江地方に居住した。

堀内は、一九〇二年までの五年間、バックストンとP・ウィルクス（一八七一―一九三四）から学ぶ。⁽⁷⁾バックストンから霊的信仰の方面を、ウィルクスから聖書の実践的方面を教えてもらう。新生と聖化に関してみっちりとして学び、⁽⁸⁾メソジスト信仰の基礎を固めることができた。同時に、肉体と精神の両面に弱さを覚えてきたが、神癒の経験をした。信仰もはっきりしたが、健康も回復した。松江における修養生活は、⁽⁹⁾午前が聖書の学び、午後が求道者や信徒の訪問、夜は伝道集会であった。日曜日はチームを組んで遠方の地へ奉仕に行く。厳しい内容ではあったが、よく身に着いて益があった。堀内は、バックストンの講義を筆記し、「赤山講話」、「ヨハネ伝講義」、「レビ記」の本作りをする。一九〇二年にバックストンのチームが松江を去り、⁽¹⁰⁾堀内を含めて五人が同地に残り、信徒や求道者を養い導く。丸三年間その方面の奉仕を全うしたのは堀内だけであった。

三、奉仕活動開始

一九〇五年、堀内が三十才の時、自由メソジストの河邊貞吉（一九六四―一九五三）より招かれ、大阪の地へ行く。自由メソジストの教職者養成機関である大阪伝道学館責任者となる。自由メソジストは二年前に大阪伝道館を開設し、献身者も与えられて、その教育を進める必要性が生じていた。

堀内から教えを受けた人の中に、大屋左一（一八八一―一九六八）、西阪保治（一八八三―一九七〇）などがいた。一九〇九年には武川たつ（一八八八―一九四二）と結婚し、長男成旨（一九一〇―一九七四）が誕生している。一九一一年に按手札を受けた。山陰松江における八年間の修養生活で身に着けたものを、大阪伝道学館において、ことごとく実践した。この時代の講義録が、「小預言書講解」として残されている。⁽¹¹⁾大阪における働きは、丸八年間続けられた。⁽¹²⁾

四、イギリス留学

一九一三年四月から一九一四年六月まで、一年三カ月間におよぶイギリス留学をする。バックストンの招きで、イギリスにおいて学びをするとともに、見聞を広めることになる。⁽¹³⁾イギリス北部エジンバラのフェイス・ミッシェンでの学びが主となる。その他、イギリス南部ロンドンでの日本伝道隊祈祷会メンバーとの交流、ケジックコンベンション出席などとする。ロンドンにおいて日本から来ていた青年野畑新兵衛（一八八八―一九九〇）を、キリストによる救いに導く。⁽¹⁴⁾日本に帰ってから堀内自身どのような奉仕をすべきかも、よく祈ってイギリス時代を過ごすことができた。

五、日本伝道隊員となる

堀内は、一九一四年六月に帰国し、九月に日本伝道隊に入隊した。日本伝道隊は、一九〇三年にイギリスのリトルハンプトンで結成され、バックストンが総理となる。一九〇四年、東京麻布で現地日本伝道隊を設立し、ウィルクスが主幹となる。一九〇五年には神戸に移り、神戸キリスト教伝道館を開設した。一九〇七年、竹田俊造による神戸聖書学校が開校され、教職者養成機関としての働きを開始した。現地日本伝道隊ができて十三年たった段階で、堀内は隊員となる。

堀内は、入隊してから十年間、竹田俊造のアシスタントの立場で奉仕を貫く。奉仕した地は神戸、福岡、姫路であった。ことに神戸では前後二回奉仕している。一九一七年、日本伝道隊評議員となる。一九一八年八月から一九一九年にかけて竹田が外遊し、その間堀内が日本伝道隊の責任者となる。日本伝道隊形成期に堀内は奉仕し、恵みに感じて進む。その間に、次男一事（一九二六―一九五六）、三男満（一九一九―）が誕生した。

六、日本伝道隊前進運動に参与

一九二四年、竹田俊造が日本伝道隊を離脱し、神戸復興教会を創立した。⁽¹⁵⁾ 竹田は日本伝道隊創立当初からの構成員であった。日本伝道隊主幹は、ウィルクスからJ・カスバルトソンに交代した。⁽¹⁶⁾ 神戸東部地域御影に教職者養成機関である聖書学舎を開校し、沢村五郎（一八八七―一九七七）を校長とする。⁽¹⁷⁾ 堀内は、日本伝道隊日本人教職者の統轄者に立てられる。

カスバルトソンは、日本伝道隊再生をかけての伝道方策として、前進運動を打ち出す。祝福のきっかけは、聖書学舎から作られる。校長沢村は、イギリス留学から帰国早々であり、未知数の器であった。聖書学舎開校二年目あたりから、献身者数が急増する。聖書学舎そのものが伝道のセンター的役割をはたして、⁽¹⁸⁾ 伝道実習する実がつぎつぎと実る。月ごと、週ごと、日ごとに开拓伝道の奉仕が進められ、前進運動で教会が誕生した。活発な働きが展開すると、サタン来の力も働き、さまざまな問題も生じるものである。堀内は、あらゆることさらに配慮し、問題を未然に防ぐことに努力した。聖書学舎の講師陣の一人として、献身者の教育にも情熱を傾けた。

日本伝道隊の前進運動は、はじめ神戸を中心に手近なところでされた。二、三年後には、明石、芦屋、池田、大阪柏原、丹後の舞鶴、峰山へと伸びていった。一九二九年、日本伝道隊聖書学舎出版部を開設し、⁽¹⁹⁾ 月刊伝道誌、トラクト、単行本が自前で出版発行が可能となった。一九三〇年、聖書学舎は神戸東部から西部塩屋に移転した。⁽²⁰⁾ 同年、日本伝道隊関係者を喜ばせたことがあった。日本伝道隊と神戸復興教会の竹田俊造が和解したのである。⁽²¹⁾ 竹田は日本伝道隊に戻りはしなかったが、以後終生日本伝道隊との友好関係を保持した。前進運動は、一九三五年頃までの約十年間、その働きが祝福された。カスバルトソン、堀内、沢村の三者が、一致と協力をもって奉仕できたからである。

七、教団組織の中での奉仕

日本伝道隊の前進運動は、岡山県方面にも影響をおよぼしていた。香登教会牧師佐藤邦之助（一八九四―一九八一）の要請に従い、聖書学舎卒業生が数多く送り込まれた。堀内と佐藤とのかかわりは古くからあった。堀内が山陰松江のバックストーンのもとで修養していたとき、秋山由五郎（一八六五―一九四六）と共に山陰木次、水刀屋伝道をした。⁽²²⁾ その結果、佐藤一家が救いを受けた。邦之助は四才のこどもであった。後日、邦之助は日本伝道隊神戸聖書学校において、竹田俊造の薫陶を受ける。佐藤が香登教会に赴任したのは、一九一八年であった。一九二〇年から岡山県各地の開拓伝道に着手する。独立自給精神を貫く働きが広く展開された。一九三〇年、イエス・キリスト召団を結成、⁽²³⁾ 佐藤が主幹となる。⁽²⁴⁾ 教会数は十二で、以下の通りである。香登、西大寺、片上、鹿忍、尾張、瀬戸、倉敷、新見、岡山独立、飯井、富岡、寄島米倉、ということになる。⁽²⁵⁾ ここに至るまでの一切を、堀内はよく理解し、協力もした。

一九三二年、日本伝道隊の伝道地の中から十二教会が経済的自立をし、それらの教会は聖書教会と称した。⁽²⁶⁾ 聖書教会代表者は、堀内文一であった。教会名は以下の通りである。神戸、東神戸、鍛冶屋町、春日野、魚崎、板宿、須磨、三田、大久保、加古郡本庄、宇治、池田、ということになる。堀内は、聖書教会発足の翌年あたりから病気がちとなる。堀内の健康不安にもかかわらず、聖書教会全体としては、きわめて順調に発展する。聖書教会発足四年の一九三五年には、教会数が倍増して二十四となる。教会の分布も、兵庫県、大阪府、京都府、千葉県へと広がりを見せた。

一九三三年、ホーリネス分裂事件があり、日本伝道隊、イエス・キリスト召団、聖書教会、自由メソジスト教会などの関係者にも、強い衝撃を与えた。⁽²⁷⁾ 一九三四年、P・ウィルクスがイギリスで召天した。⁽²⁸⁾ 堀内、沢村はじ

め日本伝道隊関係者のだれもが、ウィルクスの感化を強く受けていた。恩師の愛に報いるという思いが一同に働く。あかしのためにも実際的必要のためにも、イエス・キリスト召団と聖書教会が合同した。⁽²⁹⁾ 新しい教団の名称は、イエス・キリスト教会であった。一九三五年に新発足し、理事長は佐藤邦之助、教会数は三十三、信徒数は一千百七十八人であった。イエス・キリスト召団側から八教会が加わり、以下教会名を記す。岡山、香登、和氣、西大寺、瀬戸、鹿忍、新見、倉敷、である。聖書教会側から二十四教会加わり、以下教会名を記す。千葉、佐倉、亀岡、福知山、綾部、宮津、中舞鶴、峰山、池田、尼崎、芦屋、六甲、東神戸、御影、春日野、魚崎、神戸、荒田、板宿、須磨、明石、高砂、西脇、篠山、である。

堀内は、健康状態が悪く、日本イエス・キリスト教会の理事長の責任は果たせなかった。だから合同の段階で、一切を佐藤に任せている。一方、日本伝道隊側の前進運動は、十年間の働きを進め、一九三五年頃には終息していく。一九三七年、バックストンの最後の日本訪問があり、⁽³⁰⁾ 五月と九月の二回、病床の堀内を見舞っている。

八、晩年および召天

堀内は、一九三五年五月、日本イエス・キリスト教会発足時には、神戸教会主管牧師をなんとかとめることができた。同年十二月に至り、健康が優れず、担任教師を別に立てる。⁽³¹⁾ そのころ、神戸市港東区荒田町三丁目二八〇番地に、土地建物を購入し、神戸教会献堂をする。一九三八年七月、神戸地方を襲った大水害で、神戸教会の建物は大きな被害を受ける。

一九四〇年一月十三日、堀内は病床生活五年で召天する。享年は六十四才であった。告別式は、一月十六日に湊川基督教伝道館において行われた。司式は佐野茂理治（一八九三～一九四八）、説教沢村五郎、弔辞野畑新兵衛他、個人略歴竹田俊造が当たる。

山室軍平との比較対照

一、山室軍平の生涯

堀内文一と山室軍平を比較対照するため、山室の生涯の概略を記す。山室軍平は、一八七二年八月二十日、山室佐八の三男として、⁽³²⁾ 岡山県阿哲郡本郷村（現在の哲多町）に誕生した。生家は、貧農であった。八才で他家に養子となる。向学心を押さえることができず、十四才で養家を出奔して上京した。東京では活版工となって働く。一八八七年に、キリスト教会に通うようになり、求道する。一八八八年七月、築地福音教会において受洗する。働きながら、独学を続ける。神と平民への献身を決意する。一八八八年九月、築地伝道学校に入学する。築地福音教会、築地伝道学校とも、メソジスト系の信仰を継承していた。⁽³⁴⁾

一八八九年六月、キリスト教青年会第一回夏期学校で、⁽³⁵⁾ 京都に赴く。新島襄と出会い、その高潔な人格と信仰に触れ、感激する。同年九月、同志社普通学校に入学し、新島襄の指導を受ける。経済的にはずいぶん厳しいところを通り、終始苦学する。一八九〇年一月、新島襄が召天し、その棺を担う。一八九四年、新神学が流行し、信仰の行き詰まりを感じ、同志社を去る。将来のために祈りつつ岡山県下で過ごす。そのとき、B・F・バックストン⁽³⁶⁾、石井十次（一八六五～一九一四）⁽³⁷⁾に出会い、開戦後までもなくの救世軍で奉仕するように、助言を受ける。

一八九五年十二月、救世軍に加わる。⁽³⁸⁾ 一八九六年一月、日本人最初の士官となり、中尉に任じられる。一八九

九年六月、佐藤機恵子（一八七四～一九一六）と結婚する。⁽³⁹⁾ 同年十月、「平民之福音」初版を発行する。⁽⁴⁰⁾ その後の山室の活躍はめざましい。一九〇〇年、娼娼運動を手掛け、⁽⁴¹⁾ 以後継続的に救済事業を展開する。一九〇四年から一九三四年まで、都合七回の海外旅行をする。イギリス、アメリカなどに会議で行く。一九〇七年、創立者ウィリアム・ブース（一八二九～一九二二）来日、⁽⁴²⁾ 山室は通訳者として奉仕する。一九〇九年、社会鍋による街頭募金を始める。一九一二年、病院を開院する。まとまった著述として、「民衆の聖書」を一九二二年から執筆する。⁽⁴³⁾ 十数年かけて聖書講解し、聖書全巻にはおよばなかったものの、民衆にわかる注解を執筆した。一九二三年、関東大震災で救世軍みずからほとんどの施設を焼失する。そうとはいえ、罹災者慰問運動を展開する。一九二六年、少将となり日本司令官に就任する。一九三〇年、中将となる。一九三七年、救世軍の最高栄誉である創立者章を受ける。一九四〇年三月十三日、六十八才で召天する。

二、堀内と山室の共通点

(一) メソジスト信仰を入信当初から晩年まで、生涯を通して貫く。ジョン・ウエスレー一七〇三～一七九一）を源流とするメソジスト信仰に生きるとともに、実践している。⁽⁴⁴⁾

(二) 奉仕活動にはいる前の修養時代に、堀内は一年間、山室は六年間、同志社普通学校で学んだ。ほんのわずかの期間ではあるが、堀内と山室は机を並べて同志社で学んだ。すなわち、両者が知己と交流を保った。

(三) イギリス宣教師B・F・バックストンと出会い、両者とも適切な指導を受けている。堀内の場合は、山陰松江に行つてバックストンの直弟子としての教育を受けた。山室の場合は、救世軍に加わる前の悩みの時期にバックストンから懇切丁寧の助言を得ている。いずれにせよ、両者は生涯にわたつて、バックストンを尊敬した。⁽⁴⁵⁾

(四) 両者の奉仕の形態は違つても、救霊に生命をかけて奉仕をする。しかも、活動初期から晩年まで、救霊への情熱が冷めることはなかった。ここにもメソジストの特質を認めることができる。⁽⁴⁶⁾

(五) 日本伝道隊、救世軍、と奉仕した組織は違ったものの、両者は日本人教職者として開拓的分野で奉仕をし、またそれをみごとなまでに確立した。もし堀内がいなければ今日の日本伝道隊はなかったし、山室がいなければ今日の日本救世軍はなかった。

(六) 堀内は、日本伝道隊教職者として、組織の一員として庶民層に対して福音宣教し、成果をあげた。⁽⁴⁷⁾ 植村正久（一八五八～一九二五）による日本基督教会、新島襄による組合基督教会、内村鑑三（一八六一～一九三〇）による無教会は、⁽⁴⁸⁾ 日本の指導者層、知識層の伝道に熱心であった。堀内は高い学識を持ちながらも、庶民層に受け入れられるような働きを展開した。山室も同じであるが、もっと徹底させて社会の底辺に届く伝道をした。これもメソジストらしい特色である。

(七) 堀内は、バックストンのもとにいたときから文筆活動をした。バックストンの講義録⁽⁴⁹⁾を本にしていった。一九〇七年、自由メソジスト時代の教え子西阪保治が、月刊誌「日曜世界」⁽⁵⁰⁾を創刊したとき、堀内は惜しめない協力をした。一九〇九年、出版社日曜世界社発足についても、同じように支えた。一九二九年、日本伝道隊聖書学会出版部を作るに際して、堀内はできる限りの助言や指導をした。一九二六年、湊川基督教伝道館において、堀内は西田昌一⁽⁵¹⁾（一九二二～一九八四）を救いに導き、洗礼を授けた。後日、西田は神戸聖文舎を開業し、キリスト教書籍販売を広く行う。一九四六年創業であるから、堀内召天後ではあるが、その影響のもとにされた働きであることは、想像に難くない。山室については、「平民之福音」、「民衆の聖書」などの本の執筆、「ときの声」のような新聞発行をしたことがよく知られている。平易さを旨とする文書伝道を実践した。

(八) 堀内も山室も、一九四〇年に召天した。この年というのは、太平洋戦争開戦の前年である。一九四〇年の時点で、キリスト教に対して軍部の圧力が強まっていた。⁽⁵²⁾ とはいえ、まだ戦争に突入はしていない段階で、両者は地上における奉仕を全うした。この二人は、同じ条件下で、同じ時代に使命を果たしたことになる。

三、堀内と山室の相違点

(一) メソジスト信仰をもち、日本人に対しての救霊に生涯をかけたことで、両者は同じである。が、身を置いた組織がちがえば、奉仕のあり方に隔たりがある。堀内は、日本伝道隊に所属した。この組織には、三つの目標があった。未伝地への開拓伝道、教職者養成機関の経営、聖会の開催である。この目標は不変であるが、これをどのような形態で押し進めていくかは定まっていなかった。創意工夫、自由自在とはいうものの、具体策を生み出すということは、大変な苦労がある。設計図なしに家屋の新築工事を進めるようなものである。山室は救世軍に所属した。イギリスの万国本営で決められた規定に従って奉仕をしなければならなかった。集会、献金、服装、何を取り上げてみても万国共通、万国本営の決めた通りにしなければ、一切は成り立たなかった。万国規定を日本という土壌に根を下ろさせることは、良きにつけ悪しきにつけ苦労があった。

(二) 両者が在世中と召天後に与えた影響には違いがある。堀内は、日本伝道隊において信仰と人格の点で模範であった。愛と謙遜についても非難すべき点はなかった。沢村五郎、小島伊助(一九四〇―一九九二)、野畑新兵衛、向後昇太郎(一九〇五―一九九二)、本田弘慈(一九二二―)など個人に深い感化を与えた。⁽⁵³⁾ 山室は、救世軍と日本のキリスト教会に、見える形で後残りする奉仕をした。山室の救世軍か救世軍の山室か、といわれるのである。

(三) 堀内は日本伝道隊を中心として、自由メソジスト、ホーリネス、ナザレン、アライアンスなどの福音派内で活動し、交流した。自分の信仰と同質のものたちと交わり、研鑽を積む。良い意味において自分の信仰をまげなかったし、譲らなかつた。一方、山室は一切こだわらなかつた。新島襄、植村正久、内村鑑三と早い段階から交わり、協力関係を結んで、自分の働きを進めた。山室は新島襄から学び、植村正久から活動資金援助や妻機恵子の世話などをしてもらい、内村とは第一次世界大戦(一九一七年)以後世の罪を糾弾することにおいて同調した。山室の生きた時代において、影響力のあるキリスト教指導者とは手をつなげるところは、気持ちよく結びついたのである。神学思想の違いはありながらもそれを乗り越えた交流と奉仕を進めた。

堀内の評価と今日の影響

一、堀内文一の長所

都田恒太郎(一九八七―一九八三)は、堀内のことを「純福音派中の神学者であった」⁽⁵⁴⁾、と記している。同派内に神学者と呼び得る人物としては、竹田俊造、笹尾鉄三郎(一九八八―一九一四)を数えることができる。⁽⁵⁵⁾ 神学者と呼ばれる人物が教職者養成機関において、献身者の教育をしなければならぬ。量の大小はあるものの、質の高い著述活動をし、信仰内容を書物として結実させるよう努力した。堀内は、日本伝道隊系の教職者として、神学的業績を残した第一人者である。もつとも、本人にはそのような自覚はなかつた。客観的にそのような評価ができるだけである。

キリスト教会の指導者は、神学者として優れているだけでは奉仕できない。堀内の最大の長所は、人格と品性と信

仰において、完成度が高かった点である。都田恒太郎は、堀内や笹尾などバックストンの直弟子には、いうにいわれぬ気品あったことを指摘している。⁽⁵⁶⁾ 堀内は聖徒と呼んで異存のない器である。日本伝道隊が十年間におよぶ前進運動をし、その目的を充分果たすことができたのは、堀内がかじ取りをしたからである。堀内の美しい品性が、日本伝道隊全体を支え導いたのである。

二、堀内文一の弱点

すでに山室との比較対照のところでも明らかにしていることであるが、堀内の感化や影響は教職者個人におよんだ。真実と実質が存在しなければ、そのような感化は与えられない。そのような長所は短所弱点にも直結している。堀内は、一九三一年に日本伝道隊から自立して、神戸聖書教会の牧師となる。聖書教会十二教会の代表者であった。しかし、神戸聖書教会は初めの段階から経済的に苦しい面があった。一九三五年に土地建物を入手して献堂することではきたが、⁽⁵⁷⁾ 有力な教会となるまで成長させることができなかった。堀内の召天後、戦争を経てその教会は消滅するに至った。このような方面の実状は、率直に弱点として認める必要がある。

さらに、夫婦や家庭生活に触れないわけにはいかない。堀内は、一九〇九年に結婚して妻たつと生涯奉仕とともにする。堀内夫妻から男児が三人誕生した。たつは主婦として家庭におさまるタイプではなかった。夫とともに集會を守り、求道者や信徒の訪問にも熱心であった。聖歌七一四番「ときのしるしは」は、⁽⁵⁸⁾ たつの作詞である。再臨信仰が強調されている。一九三三年、ホーリネス分裂事件が発生する。日本伝道隊にも衝撃と影響を与えた。堀内は、日本伝道隊の隊員が動揺しないよう適切な指導をした。冷静でなければならぬことを勧め、正しい判断をしつつ、自分たちの使命を一貫してはたすよう導いた。日本伝道隊は全体として落ち着きを取り戻していく。妻たつは熱心な

中田重治（一八七〇～一九三九）信奉者で、夫の指導に全面的に従わなかった。当時の教職者の妻がどの程度の神学的素養を持ち合わせていたかの問題でもある。神学教育を受けずに、信徒からいきなり教職者の妻になることも多かった。要するに、そのような現実をもかかえた妻とともに、波乱に富む時代に奉仕していたのである。それは、弱さとは言い切れないかもしれないが、堀内の全体像の一部として記さねばならない。三人の子どもの家庭教育、信仰継承も努力はしたが、課題を残した。

三、堀内文一の今日の影響

堀内が奉仕した日本伝道隊、そこから自立結実していった日本イエス・キリスト教団の中に、直接的影響がある。日本伝道隊は、現在も存在している。その歴史を語るとき、一九二四年に竹田が離脱した後、堀内が果たした役割は大きい。それ故に、日本伝道隊が存在する限り堀内の業績と影響は語り継がれていく。

日本イエス・キリスト教団への影響についてはどうであろうか。一九三一年に聖書教会発足、一九三五年に日本イエス・キリスト教会結成、一九四一年に日本基督教団創立時に合同して参加、一九五一年に日本イエス・キリスト教団結成の流れがある。⁽⁵⁹⁾ 日本イエス・キリスト教団結成時の教会数は二十一、信徒数一千三百四十三人であった。代表役員、責任役員、顧問として立てられた者は、教職者九名、信徒三名の十二名であった。⁽⁶⁰⁾ 氏名は次の通りである。小島伊助、道城重太郎（一九二三～一九九二）、安藤壺市（一九〇一～）、本田弘慈、長島幸雄（一九一三～一九八五）、橋本巽（一九一三～一九七六）、広瀬喜九治（一九〇二～一九八一）、水口竹次郎（一九〇九～一九八九）、井戸清一（一九〇九～）、沢村五郎である。十二人中十人までが、堀内の感化を強く受けていた。その点からすると、日本イエス・キリスト教団の中に、堀内の影響を認めないわけにはいかない。

もう一つの影響は、東京基督教大学へである。同大学の前身は、一九六六年発足の東京基督教短期大学である。⁽⁶²⁾ 東京基督教短期大学の発足と充実のために、野畑新兵衛が労している。野畑は、ロンドン留学中に堀内によってキリスト教に入信した。⁽⁶⁴⁾ 戦前は竹田俊造の神戸復興教会の構成員として奉仕した。戦後は同盟基督教団教職として重責をはたす。同教団の教職者養成機関を設立したとき、野畑が用いられた。そのような経緯をたどる場合、堀内の学識と品位が、間接的にはあるが、東京基督教大学におよんでいる。

結論

堀内文一は、神の導きに従い、献身して一九〇五―一九四〇年の三十六年間、奉仕活動をした。当初は、手探り状態の歩みであったが、徐々に確立し、さらに責任ある立場に置かれた。一生涯にわたって、日本伝道隊とその関連教団に仕えた。少なからぬ数の教職者たちが、堀内の切り開いた奉仕の道をたどっていく。

堀内は、同時代を生きた山室軍平のように手広く活動しなかったし、有名にもならなかった。自分の確信通り生きて、一見中途半端な形で生涯を閉じる。誠実な奉仕、信仰と人格は、意外なほどその世界に浸透しており、堀内の召天後や戦後において、日本伝道隊、日本イエス・キリスト教団、東京基督教大学などの方面で結実したり影響を与えた。要は奉仕活動に入るまでに、どのような信仰を確立し、訓練を受けるかである。はからずも、戦前において福音派の中の一派の基礎固めをしたことになった。

注

- (1) 鶴沼裕子『資料による日本キリスト教史』（聖学院大学出版、一九九二年）四八―四九頁。
- (2) 『時報』（日本イエス・キリスト教団出版局、一九六九年五月）一九九号、二頁。
- (3) 『巴巨杏の枝』（日本同盟基督教団神戸生田教会、一九八四年）四〇頁。
- (4) 大村晴雄『日本プロテスタント小史』（いのちのことは社、一九九三年）一一一頁。
- (5) 和田洋一『新島襄』（日本キリスト教団出版局、一九七三年）三九八頁。
- (6) 武田俊浩『燃ゆる棘』（いのちのことは社、一九七五年）三〇〇頁。
- (7) E・W・ゴズデン『燃ゆる心の使徒バゼット・ウィルクス』（いのちのことは社、一九七二年）七九―八〇頁。
- (8) 都田恒太郎『バックストンとその弟子たち』（いのちのことは社、一九六八年）一八四頁。
- (9) B・F・バックストン『信仰の報酬』（バックストン記念霊交会、一九五四年）一一七―一二三頁。
- (10) 関西聖書神学校『バックストン説教集』（ニューライフ出版社、一九八七年）一九五―一九六頁。
- (11) 堀内文一、大屋左一『小預言講解』上・下（福音伝道教団、一九五二年）。
- (12) 『神学と人文』（大阪基督教短期大学、大阪神学院、一九六七年）七集、二四―二五頁。
- (13) 『小島伊助全集』八卷（いのちのことは社、一九八三年）四四〇頁。
- (14) 『バックストン先生のおもいで』九号（バックストン記念霊交会、一九七二年二月）、一三―一四頁。
- (15) 『巴巨杏の枝』、四一―四二頁。
- (16) Eric W. Gosden, *Take Fire!* (CLC, 1960), pp.43-46.
- (17) 沢村五郎『大いなる救』（いのちのことは社、一九六八年）三二六頁。

- (18) 安藤喜市『野の声』（いのちのことは社、一九九六年）一九九〜二二三頁。
- (19) 『福音新聞』（日本伝道隊聖書学会出版部、一九二九年）一頁。
- (20) 小佐佐賀恵『神の選びと恵み』（日本イエス・キリスト教団神戸西部教会、一九九六年）四〜六頁。
- (21) 『福音新聞』一六号（一九三〇年五月）二二頁。
- (22) 佐藤邦之助『イエスを仰ぎ見つつ』（いのちのことは社、一九八二年）二九〇〜二九五頁。
- (23) 『われ弱きときに強し』（日本イエス・基督教団岡山教会、一九六三年）五頁。
- (24) 『香登教会七〇年史』（日本イエス・キリスト教団香登教会、一九六五年）三四頁。
- (25) 『岡南教会五〇年史』（日本イエス・キリスト教団岡南教会、一九七五年）六頁。
- (26) 『福音新聞』二八号（一九三二年五月）七〜一〇頁。
- (27) 『小島伊助全集』七卷、三三七〜三三九頁。
- (28) 『福音新聞』七〇号（一九三四年二月）一〜一〇頁。
- (29) 日本にエス・キリスト教団宣教研究所『信仰生活のすべて（信徒必携）』（日本イエス・キリスト教団出版局、一九七三年）八六頁。
- (30) 『信徒の報酬』前掲書二六九〜三〇二頁。
- (31) 『福音新聞』八三号（一九三五年二月）七頁。
- (32) 『福音』五号（日本伝道隊聖書学会出版部、一九四〇年二月）一七頁。
- (33) 高道基『山室軍平』（日本基督教団出版局、一九七三年）。
- (34) 三吉明『山室軍平』（吉川弘文館、一九七一年）三三、三六頁。
- (35) 秋本巳太郎『山室軍平の生涯』（救世軍出版供給部、一九五一年）四一〜四四頁。
- (36) 山室軍平『私の青春時代』（救世軍出版供給部、一九八四年）一〇六〜一〇七頁。
- (37) 柴田善守『石井十次の生涯と思想』（春秋社、一九六四年）八五〜九六頁。
- (38) 『救世軍日本開戦一〇〇年記念写真集』（救世軍本営、一九九七年）一七五頁。
- (39) 『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局、一九八六年）一六九八頁。
- (40) 松浦剛『山室の『平民之福音』を読む』『祈の友』午後三時祈の友会、二〇二号、一九九八年八月）一一三〜一二五頁。
- (41) 吉屋信子『ときの声』（筑摩書房、一九六五年）六五、七四頁。
- (42) 佐波亘『植村正久と其の時代』第二卷（教文館、一九六六年、復刻版）六七七〜六九二頁。
- (43) 関根文之助『日本救世軍の父——山室軍平』（信仰偉人群像・近世篇）、ヨルダン社、一九六六年）三五六〜三五九頁。
- (44) ジョン・ウエスレー『キリスト者の完全』（日本ウエスレー出版協会、一九六三年）三〇〜四一頁。
- (45) 『私の青春時代』前掲書、九八頁。
- (46) 都田恒太郎『日本メソジスト教会の説教』（説教者のための聖書講解）、三七号、日本基督教団出版局、一九八二年二月）四〜一〇頁。
- (47) 海老名有道、大内三郎『日本キリスト教史』（日本基督教団出版局、一九七〇年）四五二頁。
- (48) 松浦剛『内村の『ロマ書之研究』を読む』『祈の友』前掲書、二〇二号、一九九八年四月）一〇五〜一〇七頁。
- (49) 『新聖書大辞典』（キリスト新聞社、一九七一年）四頁。
- (50) 『日本キリスト教歴史大辞典』（教文館、一九八八年）一〇二八頁。
- (51) 『日本キリスト教歴史大辞典』一〇二二頁。
- (52) 土肥昭夫『日本プロテスタントキリスト教史』（新教出版、一九九〇年）三四一〜三四八頁。
- (53) 松原和人『一粒の麦もし死なば』（ニューライフ出版、一九八五年）一六、二三頁。
- (54) 『キリスト教人名辞典』前掲書、一五七〇頁。
- (55) 車田秋次『御霊の法則』（車田先生米寿記念出版委員会、一九七四年）四三〜四五頁。
- (56) 『バックストンとその弟子たち』前掲書、一三二頁。
- (57) 『福音新聞』八三号、一九三五年二月、七頁。
- (58) 中田羽後編『聖歌』（日本福音連盟、一九五八年）。

- (59) 『福音』四二号（日本伝道会、一九五一年）六頁。
(60) 『教団四〇年史』（日本イエス・キリスト教団、一九九一年）三三頁。
(61) 『東京キリスト教学園のあゆみ』（三校沿革史編集委員会、一九八九年）九九頁。
(62) 『東京キリスト教学園のあゆみ』増補版。
(63) 『浜田山Ⅱ』（浜田山編集委員会、一九九六年）一―二、二一―二三頁。
(64) 野畑新兵衛『棕櫚の樹のごとく』（いのちのことば社、一九七一年）二八四頁。

（日本イエス・キリスト教団 名古屋教会牧師）